

## 第十章 明石の物語 男御子誕生

[第一段 明石女御、産期近づく]

\*年返りぬ(年が改まりました)。 \*注に<源氏四十一歳、紫の上三十三歳、女三の宮十五六歳、明石女御十三歳、柏木二十五六歳、夕霧二十歳。>とある。私なりに言い換えると、源氏殿 41 歳、紫の上 33 歳、三の宮 15 歳、桐壺妃 13 歳、藤若君 26 歳、源若君 20 歳。

桐壺の御方近づきたまひぬるにより(桐壺妃のご出産が近付き為さったので)、正月朔日より(しゃうぐわちつたちより)、御修法不断にせさせたまふ(六条院では安産祈願の読経を不断に上げさせなさいます)。寺々(てらでら)、社々(やしろやしろ)の御祈り(での祈願も)、はた数も知らず(また多く上げさせなさいます)。

大殿の君(源氏殿は)、\*ゆゆしきことを見たまへてしかば(葵の上が産後の肥立ちが悪く亡くなったことから、出産には危険が伴う事を実際に御覧になっていらっしやったので)、かかるほどのこと(こうして間近に迫って来たことを)、いと恐ろしきものに思ししみたるを(とても恐ろしく身に沁みて御思い為さり)、\*対の上などのさることしたまはぬは(対の上などが懐妊なさらなかったのは)、口惜しくさうざうしきものから(残念で物足りないものの)、うれしく思さるるに(反面で安心に思えなさったが)、まだいとあえかなる御ほどに(この愛娘の幼妃はまだとても年がお若いので)、いかにおはせむと(如何お成りかと)、かねて思し騒ぐに(前々からご心配でいらしたが)、如月ばかりより(二月になって)、あやしく御けしき変はりて悩みたまふに(妙にご容態が変わってお苦しみ為さったので)、御心ども騒ぐべし(殿も御方々もご心配なさいます)。 \*「ゆゆしきこと」は注に<葵の上が夕霧を出産して亡くなった例をさす。>とある。 \*「対の上など」の「など」は語り調子でのほんの付け足しで、殿の気持ちは対の上にはしかないのだろうとは思いますが、花散里や常陸君や空蟬は不細工と語られているものの、二条東院には他の女たちも世話しているようだし、お手付き女房も何人も居ただろうに、それらが尽く子を宿さなかった、というのは藤原殿の胤付け具合と比すまでもなく、源氏殿の胤の勢いや女の選び方に少なからず歪んだ要素は疑われる。それに引き換え、朱雀院の胤である皇太子の幼な妻である桐壺妃への胤付けの見事さは何を物語るのか。いや、実相であれば尚更、何を意味するのか。

陰陽師どもも(天文方位学者の陰陽師たちも)、所を変へてつつしみたまふべく申しければ(御寝所を変えて天気に従いなさるよう進言申したので)、他のさし離れたらむはおぼつかなしとて(他のあまり離れた邸では目が行き届かないという事で)、かの\*明石の御町の中の対に渡したてまつりたまふ(他ならぬ明石御方の冬の町の内側の東の対に妃を御移し申しなさいます)。 \*「明石の御町の中の対」は注に<六条院内の明石御方の町の中の対。第二番目の対。>とある。「あかしのおおんまち」という言い方は初めてに思う。

こなたは(この冬の町は)、\*ただおほきなる対二つ(ただ大きな対屋が二つに)、廊どもなむめぐりてありけるに(廊下を廻らせてあったので)、御修法の\*壇隙なく塗りて(その中の対屋を独立した講堂に見立てて、中庭に祭壇をしっかりと築いて)、いみじき験者ども集ひて(修行を積んだ僧たちを集めて)、ののしる(読経させます)。 \*「ただおほきなる対二つ廊どもなむめぐりてありける」は注

に＜明石の町は、普通の寝殿を中央に左右対の屋を配置する造りとは違って、大きな対の屋が二棟あり、それを渡廊で囲んでいる造りである。＞とある。六条院の再現考証上、非常に重要な記述だろう。＊「壇隙なく塗りて」は一見したところ、職人が室内の祭壇を漆喰で綺麗に塗り仕上げた、みたいに読んだ。が、対屋は専用の読経講堂ではない。パイプオルガンを設置しちゃ駄目でしょ、みたいな。で、「廊どもなむめぐりてありけるに」の「なむ」が、どうも事情説明に思えて、是は＜廊で囲まれた中庭に祈祷場を壇状に高く盛り土した＞と読むことにした。この際、祭火もガンガン焚こう。旧暦二月は今の三月だが、外はまだ寒いし。で、「ひまなし」は＜隙間無し＝丁寧に綺麗に＞ではなく＜手抜き無し＝しっかりと＞。

＊母君(実母の明石御方は)、この時にわが御宿世も見ゆべきわざなめれば(この妃の御子御出産で自分の御運勢も分かるという事なので)、いみじき心を尽くしたまふ(それは必死に看護なさいます)。＊「ははぎみ」は明石御方らしい。しかし、公式の「母君」は紫の上だろう。話の流れで、こういう言い方も成立するという事か。勿論、明石御方は桐壺妃の実母であり「母君」には違いないが、紛らわしいので＜明石の母君＞くらいに言えないものだろうか。それとも、紫の上は「母上」だろうか。注には＜『完訳』は「この出産で、わが運勢も証されるとする。女御の出産が無事か否か、また男子か女子か。明石一門が皇統と繋って繁栄するか否か」と注す。＞とある。

## [第二段 大尼君、孫の女御に昔を語る]

かの＊大尼君も(桐壺妃の祖母であるあの大堰に住む大尼君も)、今はこよなき＊ほけ人にてぞありけむかし(今はすっかりもうろくした老人になっているかと思われたが)、＊この御ありさまを見たてまつるは(この御懐妊なさった桐壺妃が冬の町にいらっしゃるとい事情を押し奉ると)、夢の心地して(明石御方を訪ねれば妃にお目にかかれるだろうと夢心地で)、いつしかと参り(早速に参上し)、＊近づき馴れたてまつる(妃に御会いして親しくお話し申し上げます)。＊「大尼君」については、この文意の注に＜『完訳』は「語り手の推測。大堰転居のころは思慮深い人だった。今は六十歳半ばの老耄の人」＞とある。＊「惚く」は＜惚ける、呆ける＞。「ほけびと」は＜もうろくした老人＞と古語辞典にある。さて、この述辞の「～ぞありけむ」は＜～ということでありそうだ＞という推量だが、この推量は会話文ではないので、後ろに付く「かし」は近い話し相手に同意を促す念押しではない。即ち、この「かし」は草子地文での語用なので、語り手が読者に対して疑問を差し挟んで話の間を置いた係助詞「か」に、過去の助動詞「き」の連体形「し」を前言の状態を客体視して以下に話の展開を図る前置詞として語用したものを付けた語体、とは詰り「しかし」の「かし」で＜～かと思われたが＞という言い方だ。＊「この御ありさま」は＜桐壺妃の御懐妊＞ではなく、御懐妊なさった桐壺妃が＜冬の町で明石御方の看護下で養生されていらっしゃるので、冬の町を訪れば妃にお目にかかれるという事情＞なのだろう。＊「近づき馴れたてまつる」は注に＜孫の明石姫君と別れて十年ぶりの再会である。「薄雲」巻に明石姫君三歳で二条院に引き取られた。＞とある。

＊年ごろ(参内してから二年近く)、母君はかう添ひさぶらひたまへど(明石御方は桐壺妃に添って仕えなさったが)、昔のことなど(妃の生い立ちなどの昔の事は)、まほにしも聞こえ知らせたまはざりけるを(上や妃にご迷惑かと遠慮して在りのままには知らせ聞かせ申しなさっていらっしゃらなかったが)、この尼君(この祖母尼君は)、喜びにえ堪へで(嬉しさのあまり)、参りては(妃にお目にかかっては)、いと涙がちに(もう涙がちに)、古めかしきことどもを(古い経緯話を)、わななき出でつつ語りきこゆ(その時々を思いを思い出しては声を震わせて話し申します)。＊「年ごろ」は＜ここ数年の間。年来。副詞的にも用いる。＞と大辞泉にある。明石御方が姫に付き添って暮らせるよ

うになったのは、姫が源氏家の正室の子という家格で入内を果たした後に、実母ではあるが紫の上の代理として後見役を務めるという立場で参内して(藤裏葉巻二章四段)からだ。姫の入内は「かくて六条院の御いそぎは二十余日のほどなりけり」(藤裏葉巻二章一段)と一昨年の四月二十日過ぎのことだったので、今の二月現在は足かけ三年目の丸二年近くの伺候ということになる。

初めつ方は(初めは)、あやしく\*むつかしき人かなと(何だか気味の悪い人だなあと)、\*うちまもりたまひしかど(桐壺妃は尼君をじっと見つめていらっしゃったが)、かかる人ありとばかりは(こういう祖母がいるという事だけは)、ほの聞きおきたまへれば(いくらか聞いていらっしゃったので)、なつかしくもてなしたまへり(親しく対応なさいました)。\*「むつかし」は<不快だ、気味が悪い>と古語辞典にある。見慣れない老婆、見慣れない風体、見慣れない間柄、だったワケだ。\*「うちまもる」は<見つめる、見守る>で、身構えて様子を見る、という語感。

\*生まれたまひしほどのこと(妃がお生まれになった時のことや)、大殿の君の\*かの浦におはしましたりしありさま(源氏殿が明石へ船着された時の御様子や)、\*明石姫の誕生は十二前の三月十六日(濡標巻二章一段)とされる。時に源氏殿 29 歳。その前年の八月に源氏殿は朱雀帝の呼び出しで帰京し、勅命によって復権し(明石巻五章一段)、明けた二月には朱雀帝は今上帝に譲位し上皇となり、源氏殿は大納言から内大臣に昇格する(濡標巻一章三段)という僅か半年での大転回だったが、既に明石在中の前年六月に明石君の懐妊を殿は知っていたので(明石巻四章二段)、三月の出産を当然に予期していた(濡標巻二章一段)、とあった。\*源氏殿の明石着とは、畿内摂津は須磨の浦で三月三日(上巳)の水難除けの祈願祭が嵐によって拒まれ(須磨巻四章二段)、それが畿内の天災を示すかのように、源氏殿は山陽道は播磨国入りして畿内の混乱を避けて好機到来を待った、という神話風な趣を持った筋立てで(明石巻一章四段)、その際の手引き役が故母桐壺更衣の従姉弟とは即ち殿の従姉弟叔父に当たる親族でもあった明石入道だったワケだ。時に晩春三月、源氏殿 28 歳。

「今はとて京へ上りたまひしに(それがとうとう殿が上京なさってしまうと)、誰も誰も(明石に残された者は誰もが)、心を惑はして(先の見通しが立たず)、今は限り(是までか)、かばかりの契りにこそはありけれと嘆きしを(此处までの縁だったのかと嘆きましたが)、若君のかく引き助けたまへる御宿世の(姫が私どもをこうして都の殿に引き合わせて下された御縁の)、いみじくかなしきこと(何と有難い事)」

と(と尼君が)、ほろほろと泣けば、

「げに(そうだったのか)、あはれなりける昔のことを(一通りでなかった昔の事を)、かく\*聞かせざらましかば(このように聞かされずに居たなら)、おぼつかなくても過ぎぬべかりけり(自分の生い立ちを良く知らないままで過ごしていた事だろう)」 \*「聞かせざらむ」の「ざらむ」は「ざり」の仮定法。「ざり」は打消しの助動詞「ず」に状態を示す動詞「あり」を付けた言い方、と古語辞典に説明される。「ず」は活用語の未然形に付く、と古語辞典にあるので、「聞かせ」の「せ」は助動詞「す」の未然形であるらしい。で、未然形とは概念の在り方を提示する語尾変化なので、その在り方を「ず」と表せば「聞かせず」という「聞かす」の反意概念を意味することになる。で、問題は「聞かす」の意味だ。「聞か」はカ行四段語尾変化動詞「聞く(聞き知る)」の未然形だから主語は発言者の桐壺妃だ。ということは、此处の助動詞「す」は尊敬や謙譲の語用ではなく、また自己使役を意味しない。となると、受身の語用としか解せない。意外なほどに現代語の語用に近いことに却って戸惑うが、大辞泉の補説に<平安時代以降、漢文訓読文の「しむ」に対し、主に和文系統の文章に用いられた。中世以降、下一

段化して、現代語の「せる」となる。＞とあるので、当時の女言葉にしては漢文調の男言葉を意識した気張った物言いだったのかも知れない。

と思して(と桐壺妃はお思いになって)、うち泣きたまふ(泣きなさいます)。心のうちには(また内心では)、

「わが身は(私の生い立ち)、げにうけばりていみじかるべき際にはあらざりけるを(本当は威張って格違いを示すほどの身分ではなかったのに)、対の上の御もてなしに磨かれて(対屋夫人の御養育のお蔭で)、人の思へるさまなども(周囲の目からも)、かたほにはあらぬなりけり(未熟者とは見られなかったのだろう)。\*人びとをばまたなきものに思ひ消ち(他の妃たちを取るに足らないと見下して)、こよなき心おごりをばしつれ(この上もない慢心をしていたものだ)。世人は(世間の人)、下に言ひ出づるやうもありつらむかし(陰で私の悪口を言っていたのかも知れない)」 \*「人びと」は文意から<他の妃たち>らしい。

など思し知り果てぬ(などを思い至りなさいました)。

母君をば(実母こそは)、もとよりかくすこしおぼえ下れる筋と知りながら(前から離れ暮らした事からも少し身分の低い家柄だとは知っていたが)、生まれたまひけむほどなどをば(ご自分がお生まれになった時のことまでが)、さる世離れたる境にてなども知りたまはざりけり(そのような畿内の外の辺境地だったことなども桐壺妃はご存じなかったのです)。いとあまりおほどきたまへる\*けにこそは(これはあまりに苦勞知らずでいらっしゃるということだろうか)、あやしく\*おぼおぼしかりけることなりや(変に頼り無い話のようです)。 \*「けにこそは」は「氣にこそは」で<様子に見えることこそが>という言い方だろうが、文末は「なりや」という半疑問で結んでいるので、この「けにこそは」は<～で居る所為だろうか>という文意だ。 \*「おぼおぼしかりけること」は敬語遣いが無いから語り手の言う<話自体のこと>らしい。姫自身の記憶の無さ、という事ではないようだ。ただ、女の子は小さい時の事を記憶している事が多いとも聞いた気がするが、この姫には記憶が無いのだろうか。因みに、明石一家が大堰山荘に上京したのは十年前の秋で明石姫3歳のことだったが、姫はその冬には二条院に引き取られた。姫は三月生まれなので数え年の3歳でも、年末なら満年齢の二歳半は過ぎていたかと思う。明石御方が六条院入りしたのはその四年後の秋だが、同居は許されないまま三年前の入内まで近くには居たものの別居していた。尼君はずっと大堰に居た。まあ、それだけ殿と上が姫に徹底的に英才教育を施した、と置いて置く。

かの入道の(あの明石入道が)、今は仙人の(今は山に籠もって)、世にも住まぬやうにてゐたなるを聞きたまふも(世捨て人のように居るということをお聞きなさるにつけても)、心苦しくなど(妃は自分の所為かと)、かたがたに思ひ乱れたまひぬ(多くの恩を思い悲しみなさいます)。

[第三段 明石御方、母尼君をたしなめる]

いとものははれに眺めておはするに(そのように妃がそれは物悲しげに沈んでいらっしゃる所に)、御方参りたまひて(御方が参上なさって)、日中の御加持に(にっちうのおんかぢに、昼の御安産祈祷に)、こなたかなたより参り集ひ(邸内のあちらこちらから人が集まって)、もの騒がしくののしるに(大勢で物騒がしく読経を上げているというのに)、御前にこと人もさぶらはず(妃

のお側には女房が控えておらず、尼君(祖母尼君だけが)、所得ていと近くさぶらひたまふ(腰を落ち着けてごく近くに控えていらっしやいます)。

「あな、見苦しや(まあ見つともない)。短き御几帳引き寄せてこそ(小さな御几帳でも引き寄せて)、さぶらひたまはめ(人目をお避けなさいませ)。風など騒がしくて(風が強いので)、おのづからほころびの隙もあらむに(御簾も乱れて隙間から部屋の中が見えますよ)。\*医師などやうのさまして(医者のように寝台にまで入って)。いと\*盛り過ぎたまへりや(本当に鈍って御出でなこと)」 \*「医師(くすし)などのやう」は注に<医師は貴人の御帳台の中にまで入れる。尼君が女御の側にいることを擲揄。>とある。 \*「盛り過ぐ」は<衰える>。注には<『集成』は「ほんに盛りを過ぎていらっしやる。老耄をやわらかくたしなめて言う」と注す。>とある。

など(などと御方は尼君を)、なまかたはらいたく思ひたまへり(妃や女房の手前きまり悪く思いなさいませ)。\*よしめきそして振る舞ふと(尼君は自分では十分品良く振舞っていると)、おぼゆめれども(思っているようだが)、もうもうに耳もおぼおぼしかりければ(もやもやと耳も遠いようなので)、「ああ」と、傾きてゐたり(良く話が分からないように耳を傾けていました)。 \*「よしめきそす」は「由めく(由緒ありげにする、上品にする)」の連用形に接尾語の「過す(度を越す、熱中する、満たす)」が付いた語で<十分心得た心算でいる>。

さるは(しかし尼君は)、いとさ言ふばかりにもあらずかし(そう言う程の年でもなかった筈で)、六十五、六のほどなり(六十五、六歳くらいです)。尼姿いと\*かはらかに(尼君の喪服姿はこざっぱりとして)、あてなるさまして(上品で)、目艶やかに泣き腫れたるけしきの(目元が潤んで泣き腫らした様子が)、あやしく昔思ひ出でたるさまなれば(どうも昔を思い出していたみたいなので)、胸うちつぶれて(御方は尼君の話と妃の動揺を察して)、 \*「かはらか」は「かわらか」に同じで<さわやか、さっぱりしている>と古語辞典にある。

「古代のひが言どもや(古いうろ覚えの話でも)、はべりつらむ(申し上げたのでしょう)。よく(尼君は此の頃は良く)、この世のほかなるやうなるひがおぼえどもにとり混ぜつつ(在りもしないような作り話を取り混ぜては)、あやしき昔のことどもも出でまうで来つらむはや(おぼろげな昔話をし出すようですから)。夢の心地こそしはべれ(夢物語ですよ)」

と(と妃を)、うちほほ笑みて見たてまつりたまへば(微笑んで拝し申しなさると)、いとなまめかしくきよらにて(妃はそれはもう瑞々しく美しく)、例よりもいたくしづまり(いつになく物静かで)、もの思したるさまに見えたまふ(思い詰めていらっしやるようにお見えになります)。わが子ともおぼえたまはず(その我が子とも思えない)、かたじけなきに(尊さに)、

「いとほしきことどもを\*聞こえたまひて(詰まらない話をお聞きになって)、思し乱るるにや(お悩みのようだ)。\*今はかばかりと御位を極めたまはむ世に(立後の暁には)、聞こえも知らせむとこそ思へ(私から生い立ちをお聞かせ申そうと思っていたので)、口惜しく思し捨つべきにはあらねど(情け無いとお忘れなさるべき事ではないが)、いといとほしく心劣りしたまふらむ(今は気懸かりな話で気落ちなさるのではないだろうか)」 \*「聞こえたまふ」の主語は桐壺妃。「聞こゆ」は

<申し上げる>という謙譲語でもあるが、「聞く(聞き知る)」とは別の<聞こえる、耳にする、伝わる>を意味する語でもある。 \*「今はかばかりと御位を極めたまはむ世」は注に<立后をさしていう。>とある。

とおぼゆ(と思えたのです)。

#### [第四段 明石女三代の和歌唱和]

御加持果ててまかでぬるに(昼の御祈祷が終わって僧たちが去ると)、御くだものなど近くまかなひなし(御方は御果物などを妃の近くに用意して)、「こればかりをだに(これだけでも)」と、いと心苦しげに思ひて聞こえたまふ(と食の進まない妃を労って勧めなさいます)。

尼君は(尼君は妃を)、いとめでたうつくしう見たてまつるままにも(とても喜ばしく可愛いと拝し申しては)、涙はえとどめず(嬉し涙が止まりません)。顔は笑みて(顔は笑って)、口つきなどは見苦しくひろごりたれど(口は恥じらいも無く大きく開いていたが)、まみのわたりうちしぐれて(目の周りは濡れて)、ひそみゐたり(眉はひそめていました)。

「あな(何て)、かたはらいた(だらしない)」

と(と御方は尼君に)、目くはすれど(目配せするが)、聞きも入れず(尼君は気にしない)。

「老の波かひある浦に立ち出でて、しほたるる海人を誰れかとがめむ (和歌 34-17)

「寄る年波の甲斐有って、海人は濡れ手の貝拾い (意識 34-17)

\*注に<尼君の和歌。「貝」と「効」、「尼」と「海人」の掛詞。「波」「貝」「浦」「潮垂る」は「海人」の縁語。>とある。須磨巻での歌詠みなどから類推するに、此処にある海の縁語も掛詞も使い古しの語用ではあるのかもしれないが、明石物語の深さも相俟って、少しも古さを感じない良く纏まった歌、に私は思う。「老い」と「海」が御題の大喜利なら名作だ。

\*昔の世にも(昔の歌にも)、かやうなる古人は(こうした老人は)、罪許されてなむはべりける(大目に見てもらえたものですよ)」 \*「昔の世にも」は単に<昔から>という言い方とは思えない。昔から老人の失敗は許される、という言い方は、あまりにも普通の日常語であって、わざわざ歌に添える言葉としての趣は無い。必ずや、この歌の下敷きになった歌が在るに違いない。で、あえて<昔の歌にも>と言い換える。注には<以下「罪許されてなむはべりけり」まで、和歌に続けた尼君の詞。『完訳』は「おきなさび人などがめそかり衣今日ばかりぞと鶴も鳴くなる(伊勢物語百十四段)によるか」と注す。>とある。『完訳』の指摘した歌は、「かりごろも」と「けふばかり」の「かり」の語呂と、「狩り」だけに「今日ばかりの命」と鶴(たづ)が鳴く風情、という遊び気分の楽しげな歌に思える。確かに、翁に狩衣装束は似合わない、という老人を揶揄する筋が前提になっている歌詠みではありそうだが、基調はやはり遊び気分に思える。いや、遊び気分だからといって、何もこの『完訳』の指摘に不服がある訳では無い。ただ、他にも老いを詠んだ歌はあるだろうし、「昔の世にも」というくらいだから、この歌が本歌取りになるような元歌があるような気がする。尤も私には到底、その指摘は出来ないが。

と聞こゆ(と尼君が申します)。\*御硯なる紙に(妃は御自分の硯箱の中にある紙に、こうお詠みになります)、 \*「おんすずりなるかみに」は注に<女御の硯箱の中にある紙にの意。敬語「御」があるので、女御の所有という意。「硯」は「硯箱」、「なる」は存在の意。>とある。実に尤もな注で、だから言い換えはそのようにすべきだ。

「しほたるる海人を波路のしるべにて、尋ねも見ばや浜の苦屋を」(和歌 34-18)

「苦勞なさった御祖母様、そして私が此処に居る」(意識 34-18)

\*注に<女御の歌。「しほたるる」「海人」「波」の語句を受けて、「訪ねて見ばや」と唱和する。>とある。また、訳文には「泣いていらっしやる尼君に道案内しいたいて、訪ねてみたいものです、生まれ故郷の浜辺を」とある。「苦屋(とまや)」は<苦で屋根をふいた粗末な小屋。>と古語辞典にある。「苦」は<スゲ・カヤなどでムシロのように編んで屋根や家の周囲などの覆いにするもの。>とある。尼君から明石の様子を聞いた桐壺妃が粗末な浜辺の小屋を、どういう思いで思い描くのか。実態を知らないからこそ気楽に詠める、という言い方も出来そうだが、先ずは、それらを自分の事として受け入れようとする素直な気持を表したもの、と読んで置きたい。

御方もえ忍びたまはで(御方もとても堪え切れなさらずに)、うち泣きたまひぬ(泣きなさいました)。

「世を捨てて明石の浦に住む人も、心の闇ははるけしもせじ」(和歌 34-19)

「出家こそ親の未練の見せ所」(意識 34-19)

\*注に<明石御方の歌。父明石入道を思いやる。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ路に惑ひぬるかな」(後撰集雑一、一一〇二、藤原兼輔)を踏まえる。>とある。この場に於いて、桐壺妃の言う「浜の苦屋」が<明石入道の住まい>を意味している事は間違い無い。尼君がそれをどのように桐壺妃に伝えたのか、妃がそれをどのように受け止めたのか、そして御方はその二人をどのように見ていたのか。それにしても、意固地なまでに中央政権への食い込みに執念を燃やした親父殿のことが、その最終結果が現れるであろうこのお目出度の前にして、改めて御方には偲ばれた、ということらしい。「世を捨つ」は<出家する>だろうが、「出家する」とは<世俗の利害関係から離れて人生を澄んだ目で見るとか、みたいなことかと思ふ。が、世俗の利害関係から離れてなど生きて行けない有機生命体のヒトにして、「出家」は根本的に矛盾を孕んだ立ち位置であり、現に寺院の物理的運営は有力者の庇護に与り、実利としての学術貢献が期待されての存在意義は客観的事実だ。それが、親心だけは達観出来ない、みたいな言い方には私は共感しない。柄にも無く強弁すれば、是は筋も技巧も歌としての趣きに達していないただの感想文に思える。とまで言うのも、私にはこの「浜の苦屋」が王家から見てこそ粗末でも、庶民から見れば御殿に違いない、と思えてならないからだ。無論、受領の全てが蓄財出来た訳ではないだろう。苦勞は有っただろう。明石入道には多分、自分の地位を失わない限りに於いて、関係者間の折衝を繰り返し最大限に有利に立ち回る才もあったのだろう。商品開発も手掛けたかも知れない。その土地の生産物が投機性の高いものだという読みもあったかも知れない。その上での成功者、ではあるのだろう。が、「出家」が暗示する<行き詰まりを見せる現政権から退いて、より広い視野から好機を窺う>のは良いとしても、明石入道の場合はあくまでも個人的に<中央で凋落した態勢を地方で立て直して、再度中央での巻き返しを図る>という立場で、その為の地方の犠牲などは利用するだけの意味しか認めない、という見下げた価値観を貫いているように見える。そして、源氏殿はその野心に丸々乗った、というか十分に逆利用した。いや、身分社会にあってはそれが当然の価値観ではありそうだが、現代人の私には明石御方の生き方

はどうしても卑屈に見えて、止むを得ない事情に同情は出来ても、共感はしない、というより、したくない。このことは作者自身にしても、その問題提起を当時の身分社会に向けて、夕顔の生き方を描く事で試みた筈だ。私はそう読んでいる。尤も、作者は女の実感として、身分社会とは言っても娘を取り上げられることに納得のしようがない、という思いだったかも知れない。が、私は現代の情報社会に生きる者として、部外者勢力の、必ずしも暴力ではないにせよ、その圧倒的な影響力を聞き知るにつけて、この身分制なる内部規律を金科玉条のように崇める精神構造に少なからぬ苛立ちを禁じ得ない、という感だ。そしてそれは同時に、歴史文化を客観的に評価する労を怠けて、折角の構成員共有の蓄積財産を蔑ろにする態度への苛立ちだ。いや是は我ながら、何だか妙に力んだ。

など聞こえ(などと申して)、紛らはしたまふ(涙を誤魔化しなさいます)。

\*別れけむ暁のことも(祖父入道と別れたという暁の事も)、夢の中に思し出でられぬを(夢の中にも思い出せられないのを)、「口惜しくもありけるかな(残念だ)」と思す(と妃はお思いなさいます)。 \*「別れけむ」の「けむ」は過去事象についての伝聞を示す助動詞で<~だったとかいう、~だったそうな>という言い方、と古語辞典にある。注には<過去推量の助動詞「けむ」伝聞のニュアンス、主語が明石女御ゆえである。>とある。「暁のこと」については、十年前に入道一人を残して一家が明石を立つ日の語りに「秋のころほひなれば、ものあはれ取り重ねたる心地して、その日とある暁に」(松風巻一章五段)とあった。

[第五段 三月十日過ぎに男御子誕生]

弥生の十余日のほどに(やよひのとをよかのほどに、三月十日過ぎに)、平らかに生まれたまひぬ(御子が無事に御生まれなさいました)。かねてはおどろおどろしく思し騒ぎしかど(それまでは大変なことに思い祈禱なども盛んに上げさせなされたが)、いたく悩みたまふことなく(妃はひどく苦しみなさる事もなく)、男御子にさへおはすれば(お生まれになったのが男の御子でさえあったので)、限りなく思すさまにて(この上なく上首尾で)、大殿も御心落ちゐたまひぬ(源氏殿も安心なさいました)。

こなたは隠れの方にて(この冬の町は六条院の裏方なので)、ただ気近きほどなるに(手狭な分だけ妃や御子に近づけたので)、いかめしき\*御産養などのうちしきり(儀式立った出産祝いの来客が多く続いて)、響きよそほしきありさま(華やかで飾り立てた晴れがましきは)、げに(詠み歌の通りに)「かひある浦(苦労の甲斐があった実り)」と、尼君のためには見えたれど(尼君のためには望ましくも思えたが)、儀式なきやうなれば(やはり此处では、体裁がつかないので)、渡りたまひなむとす(母子ともに春の町の寝殿にお戻りなさることにします)。 \*「うぶやしなひ」は<出産後3日・5日・7日・9日目の夜に、親類が産婦や赤子の衣服、飲食物などを贈って祝宴を開くこと。また、その贈り物。平安時代、貴族の家で盛んに行われた。現在の「お七夜の祝い」はこの名残。>と大辞泉にある。

\*対の上も渡りたまへり(この冬の町の出産直後の産屋には、対の上も御子を御覧になりいらっしやっていました)。白き御装束したまひて(穢れ除けの白装束をなさって)、人の親めきて(親のようにして)、若宮をつと抱きてゐたまへるさま(若宮をじっと見つめて抱いていらっしやる姿は)、いとをかし(とても美しい)。みづからかかること知りたまはず(上はご自分では出産の経験がなく)、人の上にても見ならひたまはねば(人の出産に立会いなされたことも無いので)、いとめづらかにうつくしと思ひきこえたまへり(上は赤子をととても珍しくこの若宮を可愛いと思ひ申



し上げなさいました)。むつかしげにおはするほどを(むつかり気味にいらっしゃる若宮を)、絶えず抱きとりたまへば(上があやし続けなさるので)、まことの祖母君は(実の祖母君となった明石御方は)、ただ任せたてまつりて(そのままお任せ申して)、御湯殿の扱ひなどを仕うまつりたまふ(産湯の支度などを勤め申していらっしゃいます)。\*「対の上も渡りたまへり」は注に<紫の上も産屋にいらっしゃっていた、の意。>とあるが、この「渡り」は冬の町へなのか、春の町の寝殿になのか、は非常に分かり難い。が、下に「六日といふに、例の御殿に渡りたまひぬ。」とあるので、是は母子がまだ冬の町に居た時の事、と分かる。なので、そのように明示して補語する。が、であるなら、この「こなたは隠れの方にて〜渡りたまひなむとす」の文は「六日といふに」の前に置くべきではないのか。そうであれば普通に読み進めるのに、何故この「対の上も渡りたまへり」の前に述べられるのか、全く分からない。以前から、「渡りたまふ」と「渡りたまひぬ」の違いには注意させられて来たが、此处では「渡りたまひなむとす」に続く「渡りたまへり」という語りで、古文を読み慣れている人には分かり易い時間感覚かも知れないが、私にはそういう感性が備わっていないので、こういう時間経過に添わない書き方には混乱させられるばかりだ。

春宮の宣旨なる典侍ぞ仕うまつる(若宮を産湯に浸からせ申し上げるのは、春宮の宣旨を仰せ付かった典侍が勤めます)。\*御迎湯に(明石御方はその手伝い役に)、おりたちたまへるもいとあはれに(引き下がっていらっしゃるのもとても殊勝で)、うちうちのこともほの知りたるに(典侍は御方が妃の実母だという内々の事情もうすうす知っていたので)、\*「むかへゆ」は<産湯(うぶゆ)を使わせるとき、相手役として産児を受け取ること。また、その役の人。>と大辞泉にある。

「すこしかたほならば(少しぐらい難が有れば)、いとほしからましを(分相応の情けなさなのだろうが)、あさましく気高く(この御方は驚くほど教養が高く)、げに(通りで)、かかる契りことにもものしたまひける人かな(こうした王家との縁を特別にものに為さただけのことがある人だわね)」

と見きこゆ(と思います)。このほどの儀式なども(こうした産湯の遣り方なども)、まねびたてむに(詳しく語ろうというのは)、\*いとさらなりや(今さらもういいでしょう)。\*「いとさらなりや」は女房同士分かり切った事だから、という言い方。実際の読者は当事でも女房だけではなかっただろうが、女房同士の噂話の口調を意図した書き方ではあるようだ。

#### [第六段 帝の七夜の産養]

六日といふに(生まれて六日目という日に)、例の御殿に渡りたまひぬ(母子は春の町の寝殿に移りなさいました)。七日の夜(七日目の夜には)、内裏よりも御産養のことあり(帝からも出産祝い品の御授け式がありました)。

朱雀院の(朱雀院が出家なさって)、かく世を捨ておはします御代はりにや(このように世俗を離れていらっしゃるので春宮の親代わりということでしょうか)、蔵人所より頭弁(側近用人の筆頭文官である頭の弁が)、宣旨うけたまはりて(帝の命を承って)、めづらかなるさまに仕うまつれり(特例という事で使者を勤めます)。禄の衣など(ろくのころもなど、祝い品の衣類などは)、また中宮の御方よりも(他に中宮の御方からも)、公事にはたちまさり(慣例以上に)、いかめしくせさせたまふ(豪華に御揃えあそばします)。次々の親王たち(続く親王たちや)、大臣の家々(左

右の大臣家からも)、そのころの\*いとなみにて(この帝の御出産祝い日の時機を逸しないようにと)、われもわれもと(先を競って)、\*きよらを尽くして仕うまつりたまふ(立派な祝い品を贈り申しなさいます)。 \*「いとなみ」は<日常業務>だが、此处ではその原義の動詞「いとなむ(暇無く励む)」の連用名詞で<励む→間に合わせる>という語意かと思う。 \*「きよらを尽くして仕うまつりたまふ」は諸侯が参列したようにも見えるが、この話題は「御産養のこと」に付いての説明だろうから、行列仕立ての諸侯の列席はあまりにも仰々しいので、祝い品だけを贈り届けたのだろう。

大殿の君も(源氏殿も)、このほどのことどもは(この帝の御祝儀は)、例のやうにもこと削がせたまはで(いつものようには簡略に為さらずに)、世になく響きこちたきほどに(前例の無い名誉と評判沙汰だったが)、うちうちのなまめかしくこまかなるみやびの(内輪の近親者に限られた近しくて濃密な家族の機微は)、まねび伝ふべき節は(語り伝えようにも)、目も止まらずなりにけり(側仕えの女房にも窺い知れない事でした)。

大殿の君も(傍目に分かる事では、大殿も)、若宮をほどなく抱きたてまつりたまひて(若宮を直に御抱き申しなさって)、

「\*大将のあまた儲けたなるを(息子の大将が何人も子供を儲けたというが)、今まで見せぬがうらめしきに(今まで孫を見せに来ないのを不満に思っていたが)、かくらうたき人をぞ得たてまつりたる(何のこんなに可愛い内孫を授かり申したぞ)」 \*「だいしゃうのあまたまうけたなる」は注に<以下「えたてまつりたる」まで源氏の詞。夕霧が雲居雁と結婚したのは二年前の「藤裏葉」巻である。したがって、ここには藤典侍との間に産まれた子も含まれていよう。>とある。先読みから逆推しての指摘だろうか。一応踏まえたいが、其処までの補語は出来ない。

と、うつくしみきこえたまふは(可愛がりなさるのは)、ことわりなりや(当然です)。

日々に(日に日に)、ものを引き伸ぶるやうにおよすけたまふ(若宮はものを引き伸ばすように成長なさいます)。御乳母など心知らぬほとみに召さで(妃は御乳母についても新しい者を直ぐには取立てなさらず)、さぶらふ中に、品、心すぐれたる限りを選びて(ご自分に仕えている者の中から身分や人柄の優れた者を選んで)、仕うまつらせたまふ(若宮に仕えさせなさいます)。

#### [第七段 紫の上と明石御方の仲]

御方の御心おきての(御方の御心構えが)、らうらうじく気高く(卒が無く品が有って)、おほどかなるものの(ゆったりとしているものの)、さるべき方には卑下して(目上の方には控え目にして)、憎らかにもうけばらぬなどを(分不相応には偉ぶらない事を)、褒めぬ人なし(褒めぬ人は居ません)。

対の上は(対の上は以前は明石御方を)、まほならねど見え交はしたまひて(物越しながらも会ってお話し合いなさって)、\*さばかり許しなく思したりしかど(どうしても打ち解けられなくお思いだったが)、今は宮の御徳に(今は孫の若宮のお蔭で)、いと睦ましく(とても親しく)、やむごとなく思しなりにたり(大切な方と御思いなさるようになっていました)。 \*「さばかり許しなく思したりしかど」は注に<紫の上が明石御方に対して嫉妬心を抱いた場面は、「濔標」「松風」「薄雲」「玉鬘」等

に見られる。>とある。確かに、上は手が付けられないほどではないにしても、殿の浮気を嫌がってはいた。頼りとする男が他の女に心移りするのを平気で居られる女はいない。まして上は、血筋こそ式部卿宮の実の娘ではあるが、宮家育ちではなく、それどころか宮の北の方には目障りな存在として憎まれていた。人柄以前に邪魔な存在になる人間関係というものはある、のだから。だから上は、実質では天涯孤独の身寄りの無い立場を自覚せざるを得ない。本当に源氏殿だけが頼りだ。で、その殿は上を大事にしたし、基本的には上は殿を信じて来れたし、三の宮が降嫁して来るまでは、自分以上に帝に近い王家血筋の女が源氏殿には居なかったので自負も保てた。が、その中でも明石御方だけは明石姫の実母という事で、殿は受領家柄の身分以上に厚遇した。だから上は殊更に明石御方を警戒した。そういうことだろう。誰かが目障りで排除したい気持を「嫉妬心」というなら、是はそれに違いないし、そういう宿縁を憎むという気持もあるのかも知れないが、上は御方の人格を憎んでいた、ということとは違っていったように私は思っている。で、この「さばかり」は<あれほど強く、非常に>というより<いくらかは、どうしても>で、この「許し」は<心を許す事、打ち解ける事>と読む。

稚児うつくしみたまふ御心にて(上は赤子をあやすのがお好きで)、天児(あまがつ、テルテル坊主)など、御手づから作り\*そそくりおはするも(御自身で手作りして御相手なさるのも)、いと若々し(とても嬉しそうです)。明け暮れこの御かしづきにて過ぐしたまふ(今はずっとこの子守をして過ごさいます)。\*「そそくる」は<そそくさと事を運ぶ>と古語辞典にあり、此処では<かいかい>いしく子供の世話を見る=相手をする>ということだろう。

かの古代の尼君は(かの年老いた尼君は)、若宮をえ心のどこかに見たてまつらぬなむ(若宮が春の町へ移ってしまいなさったので、心ゆくまで御世話申せないのを)、飽かずおぼえける(寂しく思います)。なかなか見たてまつり初めて(なまじ出産を目近で拝し申してしまったので)、恋ひきこゆるにぞ(逢いたさを募らせ申して)、命もえ堪ふまじかめる(寿命も縮みそうです)。